

『横濱懐古』の秘密

鹿沼市立川上澄生美術館
学芸員 原田 敏行

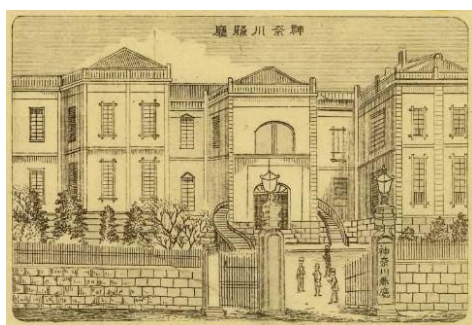
後年の川上澄生の作品のなかで、南蛮と共に大きなテーマとなるのが文明開化です。すなわち、西洋からもたらされた習慣や文物に影響を受けた明治初年の日本が舞台であり、西洋と日本の文化の出会いは川上が好むテーマでした。

ただし、川上は明治28年の生まれですから、文明開化期の日本を目の当たりにした世代ではありません。そこで川上は様々な資料を集めることで、その時代の再現を試みました。

では、どんな資料を集めていたのか、その謎を解く鍵は『版画』(1958年、東峰書院)にあります。この中で、川上は自分の趣味について述べ、文明開化なら横浜絵、おもちゃ絵、明治時代の教科書、地図などについて実際の作品や書名を挙げて詳しく紹介しています。

では、近年それをヒントにしてわかったことをご紹介します。

川上の作品に『横濱懐古』という文庫本を横にしたくらいの小さな作品があり、明治初年の横浜の姿が全10図、描かれています。私は、自分が見たこともない世界をこれほど具体的に描くには何かの種本があるに違いないと思い、例の『版画』を読み込むと『改良 横濱明細全図』という地図を紹介した文章に行きつきました。そこで、この地図について調べてみると『横濱懐古』とほぼ同じ絵が描かれており、作品の種本であることがわかったのです。



上:神奈川縣廳 下:吉田橋
尾崎富五郎《横濱明細全圖:改良》より
1896(明治29)年 銅版
国際日本文化研究センター蔵

上:神奈川縣廳 下:吉田橋之景
川上澄生『横濱懐古』より
1941(昭和16)年 木版
鹿沼市立川上澄生美術館蔵

ただ、絵はまったく同じというわけではありません。なぜなら『改良 横濱明細全図』は銅版で細かく、それを木版に起こすには画面をシンプルにする必要があったためです。そこで、両方を比較してみると、川上は建物や船、往来を行き交う人々を少なくし、さらに残したものをできる限り大きく捉えることで、木版として完成させていることがわかりました。

こうして文明開化の秘密をひとつ解き明かすことができましたが、『版画』に記載があっても今日では現物を見ることのできない資料もあり、まだまだわかっていない作品がいくつもあります。これからどんなことがわかってくるのか、私自身とても楽しみです。